

特集

# 「知恩」創刊900号記念対談 国宝・御影堂 来春の落慶法要に向けて

総本山知恩院門跡 伊藤唯眞  
総本山知恩院執事  
(御影堂修理事務局局長) 西浦道哉



昭和24年（1949）創刊の「知恩」誌は、今月号で通巻900号を迎えました。改元の節目と重なるこの機会に、伊藤唯眞総本山知恩院門跡と西浦道哉執事（御影堂修理事務局局長）に、来年に迫った国宝・御影堂の落慶法要に向けて語り合っていました。（聞き手は編集部）

## ●知恩院の歴史と教化を彩る長寿誌に

「知恩」誌が創刊70年で900号を迎え、改元の節目とも重なりました。人間の年齢で言えば、古希に当たる歳月を知恩院とともに歩んできた「知恩」に対する思いをお聞かせください。

伊藤門跡 本当に長寿の雑誌となりました。「知恩」は信仰誌であり、教化誌という性格を併せもっています。900号を迎えたのはたいへん目出度いことです。発信をする知恩院側と、それを愛読する読者の方々が愛好して継続、発刊され、念仏に親しむ人たち、「知恩」を待つて

くれた人たちが多くおられるのです。戦後の昭和、平成、そして令和へと続く70年間の知恩院の歴史と教化を彩るものの一つでありましょう。その中で、思い返しますと、有り難くも少し寄稿させてもらいました。昭和49（1974）年の315号と、10年後の秋に出た「三上人遠忌お待ち受け号」での寄稿は今も印象に残っています。315号の際は、開宗八〇〇年慶讃法要に寄せた文章で、烏澁がましくも喜びと覚悟を書いています。後者では三上人のうち、知恩院二世の源智上人についてのお話でした。源智上人が始めた報恩の念仏結縁運動によって、阿弥陀仏像が造営されます。長い年月を経て、今か